

## Dazein Daruma

全 20 作品 / 油性マーカー / だるま / 2018

高崎にある少林山達磨寺の伝承によれば、江戸中期、飢饉に苦しむ農民の副業になるようにと、9代和尚がだるま作りを伝授したという。そのモデルである菩提達磨は中国に禅宗を伝えたとされ、数ある達磨伝説のなかには、海を渡ってきて日本で聖徳太子に会ったというものまである。そして高崎では、今日でも何十万個という招福だるまが手書きされ販売されている。

『言葉についての対話』のなかで、マルティン・ハイデッガーは、対話者である日本人に次のように言わせている。「私たちにとって、空虚というのは、『存在』という語で言わんとしていらっしゃるものに対する最高の名称ですから……。」（高田珠樹訳）

哲学的思索は、何よりもギリシャ語で、百歩譲ってもドイツ語でおこなう行為であるとした哲学者にしては、オリエンタリズムさえ感じさせる奇異な関心を持ったものである。鏡に映したように逆さまに仮構された根源的な他性に自分は到達しているのだと、心から感じていたようにみうけられる。

かくしてドイツ人ハイデッガーは、ギリシャ由来の存在論と日本仏教における空虚という概念とのあいだに等価性を執拗に認めようとした。それは言ってみれば、Dasein（現存在）とZen（禅）のハイブリッドのようなものである。

ハイデッガーの口ヒゲをたくわえた DaZein だるまの風貌は、どこかアジアの賢人を彷彿させる。